Ernest Hemingway : Indian Camp

——短篇小説の技巧——

神　崎　浩

Ernest Hemingway が死んだのは，1961年7月2日のことだった。その知らせは，たちまちのうちに全世界に届けられた。当時の発表では，その死因は猟銃の手入れ中に起った暴発事故とされていた。

しかし，彼はその時猟銃を口にくわえて引き金を引いていたのだった。弾は彼の頭をふっ飛ばし，口と顎と頬の一部を残しただけだったということである。

Hemingway 夫人の Mary の強い否定にもかかわらず，彼の死が自殺によるものであったことには，疑いの余地はない。

Hemingwayが死んだ時，ボクはまだ学生であった。丁度その少し前に，彼の短篇集 *In Our Time* を読み終ったばかりだったので，ことさらに彼の死は印象深くボクの脳裏に刻まれたのである。

In Our Ttme は人間世界における，死と暴力をメイン・テーマとした短篇集であることは，よく知られていることである。たしかに，Hemingway ほど死を意識し続けた作家をボクは知らない。彼の描く世界のさまざまな状況，さまざまな登場人物は，いずれも例外なく，絶えず死と隣り合わせに生き，絶えず身に迫る破滅を意識する人間なのである。

彼が影響を受けた作家の一人である Stephen Crane も，死を見つめ続けた作家であった。彼の場合は人間を常に極限状態に置き，その極限という環境の中で人間はどのように行動し，何を摑み取るかに関心を持った。

Hemingwayはこれに対して，人間のみじめな，醜い，無残な死にざまに対して，ほとんど偏執的な関心を示し続けていた。人間の価値はその死

の瞬間にきまる，とでも言いたげな態度である。彼の描く死は，ある瞬間不意に訪れる。その死に対して勇気を持って立ち向うか，臆病な逃げ腰で回避しようとするかで，その人間の価値はきまるのである。

それでは，自殺はどうなのだろう。勇気ある死にざまなのか，臆病者の死にざまなのか，そのどちらなのだろう。その答はしばらく置くとして，ここで彼の生死観がハッキリと表われている初期の作品，"Indian Camp" に注目することにしよう。

"Indian Camp" は Hemingway の最初の短篇集 *In Our Time* の中に入れられてある15の短篇の中の一つである。この短篇集は成立の事情がかなりこみ入っているのだが，ここではそのいきさつについては触れる必要はないだろう。とにかく，"Indian Camp" はこの *In Our Time* の冒頭に置かれた作品なのである。

Nick と医者である彼の父親，それに George という叔父が，夜明け前，二人のインディアンに案内されて，難産に苦しむインディアンの女の出産を助けるために，湖を渡ってインディアン部落へ行く。その女はもう二日間も子供を産もうとしているのだが，逆子のためにどうしても産むことができない。Nick の父は麻酔を持っていなかったが，四人の男たちに女を押えさせて，ジャックナイフで帝王切開の手術を行なう。傷口は釣糸で縫い合わされた。ところが，その手術が成功し，子供が誕生した時，三日前に手斧で足を怪我して上段の寝棚で休んでいた夫の方が，剃刀でノドをかき切って自殺していたのだ。

手術が終って，小屋を引き上げる前に，上段の寝棚をのぞき込んだ父親が，それを発見したのだった。

Nickは 父親と一緒にボートで帰る時，いろいろな質問を父親にしてみる。

「あの人はどうして自殺したの，お父さん」

「わからないな，ニック。たぶん辛抱しきれなかったんだろうな」

「自殺する男の人はたくさんいるの，お父さん」

「そんなにたくさんはいないよ，ニック」

父親がボートを漕ぎ，Nick は船尾に座っている。太陽が山の向うから昇り始めている。Nick が水に手を入れると温かく感じられる。そして，Nick は自分は決して死なないと確信する。

この物語は Hemingway の短篇の中でも最も短かいものの一つである。しかし，その中に凝縮されている内容は，物語に費やされているページ数から計ることのできないほどのヴォリュームを持って，迫って来る。それは，この作品が，短篇小説を創作するのに必要な，あらゆる技巧を駆使し，一分の隙もなく計算されたものであるからにほかならないからである。

登場人物は，Nick と父親，George 叔父，インディアンの妊婦とその夫，それに二人のインディアンであるが，この物語を進めるための視点は常に Nick の視点であり，その視点は常に父親に向けられていることに注意する必要がある。

その視点を定めたために，どのような効果があるかというと，まず第一に考えられることは，一人の人物の視点によって物語が進行するので，感情が一本化され，物語が展開する世界への移入が容易であるということである。

次に，Nick の視点が父親を追っていることで，登場人物の煩雑化が防げるという効果が考えられる。物語の進行上必要ではあるが，それほど重要ではない George 叔父や二人のインディアンは，Nick の視点が父親に向けられている限り，物語の上に登場しないことになる。

時間の設定を作品の構成上，非常に重要な要素であるが，この作品では，物語の始まりを早朝，というよりは真夜中を少し過ぎた頃から，太陽が昇り始めるまでの数時間に設定してある。

これは一見何んでもないように思えるが，作者の意図は明らかに，Nick が未知の世界，つまり，子供の誕生の場面に立ち合うという，それまでに体験したことのない，予測できない世界に向って出発する時を闇の状態から始め，人間の誕生と死を目撃した後，Nick が人間を取り巻く自然界の出来事に注目し始める時，朝が来て太陽が昇るという，Nick の気持の変化を表すために設定されたものなのである。この「暗」から「明」への場面展開によって，Nick の気持を暗示するという技巧は，"The Killers" の中でも Hemingway は用いている。

ただし，"The Killers" の場合は逆に，「明」から「暗」への変化としている。

Ole Andreson が殺し屋にねらわれていることを知らせようとして，Ole の下宿に向う場面では，アーク燈が明るく輝やいていて，Ole が無気力に殺し屋に殺されるのを待っていることを知った後，Henry の店に帰る道は暗い道として描かれている。

また，Nick の気持の変化を示すために，始めの部分では，"Nick lay bak with his father's arm around him." という様子が，帰りのボートでは，"They were seated in the boat, Nick in the stern, his father rowing." と変えられている。

この Nick の気持を変えさせ，ボートの中の態度まで変えさせた体験とはどんなものだったのだろう。

Nick がインディアンの小屋に入ると，妊婦の叫び声を聞く。

"This lady is going to have a baby, Nick," he said.

"I know," said Nick.

"You don't know," said his father. "Listen to me. What she is going through is called being in labor. The baby wants to be born and she wants it to be born. All her muscles are trying to get the baby born. That is what is happing when she screams."

"I see," Nick said.

妊婦が上げる悲鳴に Nick が,

"Oh, Daddy, can't you give her something to make her stop screaming?"

と言うと，父親は,

"No. I haven't any anaesthetic."

と言い，続けて,

"But her screams are not important. I don't hear them because they are not important."

と平然と言ってのける。そうして父親は手持ちの，ほんの間に合わせの道具で，帝王切開を行ない，手術後は，"He was feeling exalted and talkative as football players are in the dressing room after a game." といった様子ではしゃいでいる。

Nick は恐らく，それまでは丁度ボートの中で父親の腕に抱かれていたように，彼を取り巻く自然界の中で起るあらゆる出来事を，父親を通して，父親の保護のもとに体験して来たのであろう。それが，この時点において，父親もまた自然によって支配されている一個の人間であると感じたに違いない。

自然は人間をその非情で圧倒的な力を持って支配し，操っているのである。自然は人間の誕生も死をも，その狂暴な意志と力で支配する。その自然に立ち向って生きる人間に対して，自然は何んの同情も示さない。それどころか無関心にさえ見えるのである。

逆子のために難産で苦しみ，手術の苦痛に耐えて子供を生む女に自然はいささかの哀れみも見せようとはしない。そして，少しでも自然の力に届する者は，自然に対する最後の反逆として，自殺する以外に逃れる道はないのである。

Nick の父親は，Nick に自然の力に勇気を持って立ち向う人間の姿を見

せ，Nick にもそのような勇気のある人間になってもらいたいと思って，手術の場に立ち合わせる。しかし Nick は，“How do you like being an interne？”という父親の質問に対して，“All right.”と答えはするものの，“He was looking away so as not to see what his father was doing.”なのである。彼の好奇心はもうずっと前に消えていた。

一方，手術に成功した父親は大得意になって喋っている。だが，そこに予想しなかった事が起きた。インディアンの夫が自殺していたのである。手術を終らせた時は，“I'll be back in the morning.”と言い，“The nurse should be here from St. Ignace by noon and she'll bring everything we need.”と用意周到な配慮を見せ，自分の医者としての腕前に自信を持っていた Nick の父親も，このインディアンの夫の自殺という手段で示した自然に対する挑戦は予期していなかった。

それだからこそ，“Take Nike out of the shanty, George.”と狼狽する。彼は Nick に自然の仕組んだ罠に対しては，それを避けようとせず，正々堂々と正面から受け止めて，それに立ち向う勇気を教えようとしたのだ。それが思いもかけない，自分の仲間であり，一緒に自然の暴力に対して立ち向うはずの同志が，仲間を裏切る行為に出たのだ。

父親の狼狽ぶりはさて置き，作者はここで，人間はどんなに勇気を持って自然に反抗を試みようと思っても，ついには破滅するものであり，不条理な死を受け入れなければならないものである，という事を言いたかったのであろう。

ところで，このインディアンの自殺のための伏線として，作者は Nick と父親が妊婦の悲鳴を聞きながら話し合っている時，“The husband in the upper bunk rolled over against the wall.”という状況によって，この男がもうすっかり生きる望みを失なっていることを読者に伝えている。ここに出て来る「壁」は，“The Killers”で Ole Andreson が殺し屋の来るのを無気力に待っている時に眺めていた「壁」と同じものである。

このようにして，Nick は父親の意図したものとは違ってはいたけれど，はからずも，人間の誕生と死を同時に体験することになる。この時，

It was just beginning to be daylight when they walked along the logging road back toward the lake.

という風景描写は，Nick の自然と人間との関り合いを理解し始めたことを暗示するものとして，作者の計算され尽した技巧を感じないわけには行かない。

一方，父親は "I'm terribly sorry I brought you along, Nickie." "It was an awful mess to put you through." と，すっかり意気消沈してしまっている。

そんな父親の気持には無関心に，Nick その日の体験を父親に問いただす。そして，

"Why did he hill kimself, Daddy ?"

"I don't know, Nick. He couldn't stand things, I guess."

"Do many men kill themselves, Daddy ?"

"Not very many, Nick."

"Do many women ?"

"Hardly ever."

"Don't they ever ?"

"Oh, yes. They do sometimes."

と続く質問とそれに対する応答は，子供と父親のどこにでもありそうな問答のようではあるが，実はこれらはその最後の質問，

"Is dying hard, Daddy ?"

と，それに続く

"No, I think it's pretty easy, Nick. It all depends."

という答を引き出すための伏線であったのである。

「死ぬって難しいことなの，お父さん」

「いいや，簡単なことだよ，ニック。時と場合によるけれどね」

というこの会話は，作者，Hemingway 生死観である。

人生を永い間生き抜いて来て，何度も生死の間を通り抜けて来た老人が口にしたのなら，この「死ぬって簡単なことだ」というひと言は，それなりに重みのあることだろう。それが，これから新進作家として世の中に出ようとする若干20数才の若者によって，こともなげに言われていることに，ボクは戸惑いを感じるのである。

「死ぬのは簡単なことだ」とは，つまり裏返して考えれば，「生きるということは大変なことだ」ということなのではないだろうか，とボクは考えて見る。そうすると，この作品以後の Hemingway の作品に登場するヒーローたちの誰を取り上げて見ても，自分の生きる世界の残酷さを十分に知りながら，ひたすらその残酷さと渡り合って生きている人間たちであることに気がつくのである。

さらにその考えを押し進めて，そのような残酷な世界と対等に渡り合い，この世の不条理さを見つめてたじろがない姿勢を取った時，人間は自殺という行為で，自然の残酷さ，不条理さを越えることができるのではないだろうか。

とにかく，この最も初期の作品の中で，作者，Hemingway は Nick のの父親の口をかりて，「死ぬのは簡単なことだ」と言わせている。そして，これがその後の彼の作品を理解するための鍵であることは，誰も否定できないことだろう。

この血なまぐさい自然との戦いの終章は，Nick が父親の漂ぐボートの船尾に腰を下ろして，ぼくは絶体に死なないぞ，と確信するところで幕を閉じる。

The First 49 Stories. by Ernest Hemingway. Jonathan Cape. London 1956.
参考書：ヘミングウエイ：20世紀英文学案内　佐伯彰一編　研究社　1966.